



岡恵さん特別講演

日本における人身取引と《性的搾取》

～相談支援の現場から～

2019年7月1日(月)、NPO法人「ポルノ被害と性暴力を考える会」(以下、PAPS)の相談支援員・岡恵さんによる講演がジェンダーフォーラム主催で行われました。PAPSから講師を呼ぶこの企画は、今年で3回目となり、恒例行事の観を呈してきました(『GF通信』29号および30号参照)。当日、参加者にはレジュメのほか、PAPSのパンフレットや啓発・防止パンフレット『SNSや街にはスカウトがいっぱい』が配布されました。

岡さんのお話でまず強く印象づけられるのが、迷惑防止条例などのルール作りやNGO/NPOの啓発活動が盛んになる一方で、AV出演への誘導、ひいては性産業における人身取引がより巧妙になっているという事実でしょう。例えば、グッズモニターのサイトが、AV女優に誘導していく一つの「窓口」でもあるということです。もちろん、質的には全く異なる仕事ですが、同一サイト・同一プロダクションの連続的マネージメントのもとでいつの間にか越境していつの間にかカラクリが存在しているのです。またプロダクションを介さず個人がアプリや求人サイトで「モデル」を募り、会ったその場で性的な動画を撮影してしまう——撮影者が「彼氏」の場合もある——事例や、「身バレ」を怖れる心理を逆に英語で書かれた契約書を突き付けられ、海外サイトで配信される事例——ネット時代において国内外の差異にほとんど意味がないことを想起してほしい——も増えているという。

また岡さんは、相談支援の経験にもとづき、被害の段階を上記のような「勧誘時」「契約時」のほかに「販売時」「販売後」も加えた分類を示し、段階ごとに固有の被害のあり方を説明してくれました。こうした実態を知ること自体が、大学生への啓蒙的意味をもつことは言うまでもありません。

さらに、講義では児童ポルノ、チャットレディなどにも触れられていましたが、そこには、この講演タイトルが示すように、人身取引という共通の問題として捉える岡さんの問題意識が伺えます。

本講義は、さまざまな段階で被害に合った人を昼夜問わず相談・支援しているPAPSの姿を浮き彫りにしています。ある女子学生は、この講義を通して、自分

がここ（大学）にいる意味を再認識したようです——「いつか私もそんな人を支えたくて、この大学に来たのだと思い出せた。」

現代社会学科・専門科目「性の人類学」（馬場淳担当）の受講者のほか、一般の方を合わせて約 150 人が、こうした現代日本社会で起きている人身取引の現状と問題に聞き入りました。最後に、本報告の補足も兼ねて、受講した学生のコメントを取り上げて、終わりにしたいと思います。

（馬場淳・現代社会学科）

FANZA というサイトのもつ「人間の持つ様々なファンタジー、妄想、幻想を A から Z まで取り扱う〈場所〉」というコンセプトが、今回の講演、そして講義全体を通したうえで見ると、非常に不快に思えた。配信サイトであるから、消費者を意識し、消費者目線でのコンセプトだろうが、「ファンタジー・妄想・幻想」を担っている女性たちの存在、現実を考えると心苦しくなった。（総合文化学科・女子学生）

主に女性が、どういうふうに被害に合うのかの段階が詳しく分かって、これは大学だけでなく、小学生くらいの子にもわかりやすく講義すると、「悪いのは自分」という意識を見直すことにもつながるので、是非行ってほしいと思いました。そして、この AV 被害は、被害に合いそうな人以外にも広く知ってもらう必要があると思いました。当事者でなくても、できることは何かあるだろうと考えました。（現代社会学科・女子学生）

本当に体調が悪くなるほど、身近にこういった人がいるのだなと感じた。架空の人ではなく、実際のこの国に住んでいて、性別を問わず、こういうことが行われていることに目を覆いたくなかった。吐き気がひどい。この話を聞いて、密やかに笑っている人にめまいがする。人の一番弱く、攻撃されやすいところを人質にとって金を稼ぐ、その金で自分を、あるいは家族を支えていたりしている奴がいるのかと思うと、吐き気がします。（心理教育学科・女子学生）

AV に出演させる方も悪いが、出る方も悪いというような風潮があるのではないかとふと思いました。途中で気づいた時に辞めれば良いという意見もあると思いますが、気づいても恐怖感や周囲の目を気にして引き返すことが出来なくなってしまっているのだと思います。単純な人の欲望だけではなく、一つのビジネスとして性犯罪行為がまかり通っていることに強い怒りを感じます。芸能界やアイドル、モデルの活動が私たちの日常と近くなっていることも問題の根深さの理由の一つではないかと思います。AV 自体をすべて否定する訳ではありません

んが、人権を侵害し、犯罪行為のうえで成り立っているものは表現物などではなく、従事する人々も批判されるべきだと思いました。(現代社会学科・女子学生)